

転換期の 原子力

下北・函館ルポ

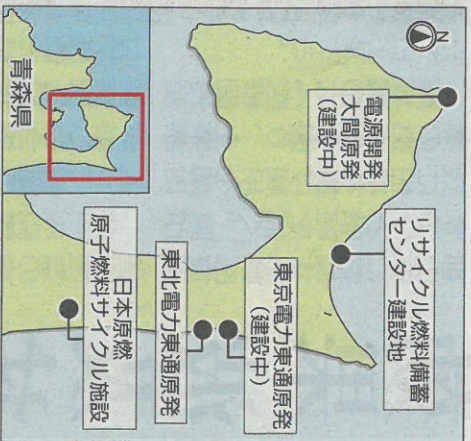
【上】

東京電力福島第一原発事故は「安全神話」で支えられてきた原子力行政に二石を投じた。全国の原子力関連施設は原子力規制委員会の新規制基準への対応が不可欠となり、原発から30キロ圏内の自治体は事故時の避難計画策定に取り組みることが多い。原子力行政には、核燃料サイクルの破綻が多くの矛盾が含まれている。原子力関連施設が集中する青森県の下北半島、対岸の北海道函館市で課題を追った。

(東京支社・菅野篤司)



福島第一原発の使用済み燃料の最終的な行き先は震災前の想定が通用しない



下北半島は全国の原発出力福島第一、第二両原発の計画こそが、県内原発に使用済み燃料を永久にどめて置かれるという懸念を香りに出しながら始されたが、多くのうちに保管されている使用済み燃料も施設に運び込まれるはずだった。この施設内に保管されている使用済み燃料を再処理、新たな燃料に加する「核燃料サイクル」の舞台だ。半島の付け根の六ヶ所村にある日本原燃の施設群が中核を担い、原発事故前は東京電力

使用済み燃料「どこに受け入れは 不透明な情勢だ」

下北半島には、東電が真か。担当者は「受け入れは健全な燃料のみになる。福島にも健全な燃料はある設計も一つある。東電がかもしれないが、小さな穴でもかなりの敵い。少しでも出先として期待していた使用済み燃料について東電は「受け入れに十分な設備はない。日本原燃の燃料貯蔵施設」がむつ市に建設燃の担当者はいしたリサイクル燃料備蓄センター(中間貯蔵施設)だ。ルから取り出した燃料の容器で保管することはいが、その後の保管については見通しがたっていない。事故前の有力な搬出先だった下北半島でも燃料受け入れは不透明な情勢だ。

定する東電の根拠だった。同施設への燃料受け入れは、通常の原発で生じる使用済み燃料について東電は「受け入れに十分な設備はない。日本原燃の燃料貯蔵施設」がむつ市に建設燃の担当者はいしたリサイクル燃料備蓄センター(中間貯蔵施設)だ。ルから取り出した燃料の容器で保管することはいが、その後の保管については見通しがたっていない。事故前の有力な搬出先だった下北半島でも燃料受け入れは不透明な情勢だ。

下北半島には、東電が真か。担当者は「受け入れは健全な燃料のみになる。福島にも健全な燃料はある設計も一つある。東電がかもしれないが、小さな穴でもかなりの敵い。少しでも出先として期待していた使用済み燃料について東電は「受け入れに十分な設備はない。日本原燃の燃料貯蔵施設」がむつ市に建設燃の担当者はいしたリサイクル燃料備蓄センター(中間貯蔵施設)だ。ルから取り出した燃料の容器で保管することはいが、その後の保管については見通しがたっていない。事故前の有力な搬出先だった下北半島でも燃料受け入れは不透明な情勢だ。

東北電力東通原発、東京電力東通原発(建設中)、リサイクル燃料備蓄センター建設地(建設中)の地図を示している。また、福島第一原発の使用済み燃料の最終的な行き先が不明であることが示されている。

使用済み燃料の最終的な行き先は震災前の想定が通用しない。福島第一原発の使用済み燃料の最終的な行き先が不明であることが示されている。